

『鷗夢新誌』 發刊までの森川竹磔

一

森川竹磔（名鍵藏、字雲卿、號鬢絲禪侶）は、明治二（一八六九）年に生まれ、

ただ、その生日については從來論じられることがなく、神田喜一郎編『明治漢詩文集』『略歴』（略歴）は中村忠行編『明治文學全集第六十二卷、筑摩書房、一九八三』においても、生年に「明治二」とのみ記して、月日は空格のままとなっている。

竹磔は、その生日に際して詠んだ詩をいくつか残しているが、そのうち一首「丙辰生日」詩（『聽秋仙館詩稿』卷二）に「生比荷花先十日、情關絲竹逼中年」（第三・四句）という句が見える。「丙辰」は大正五（一九一六）年、竹磔は大正六年九月に亡くなっている、この詩は晩年の作ということになる。「生まれたのは荷の花よりも十日前であるが、管弦絲竹のことに心奪われて中年になろうとしている」とうたうこの一聯は、おそらく清・顧祿『清嘉錄』（卷六・荷花蕩、王邁校點本、江蘇古籍出版社、一九九九）の次のような記事に基づいていると思われる。

是日、又爲荷花生日。舊俗、畫船簫鼓、競於葑門外荷花蕩、觀荷納涼。

是の日、又た荷花の生日爲り。舊俗に、畫船簫鼓、葑門外の荷花

『鷗夢新誌』發刊までの森川竹磔

蕩に競はせ、荷を觀て納涼す。

萩原正樹

本條より三條手前の同卷「雷齋」條に「二十四日爲雷尊誕」とあり、「是日」とは六月二十四日のことである。舊俗ではその日畫船や簫鼓を蘇州城外の荷花蕩で競わせ、人々は荷花を眺めて涼を楽しんだと言う^①。荷花の誕生日である六月二十四日より十日前に生まれたと竹磔自身が述べているのであるから、竹磔の生日は六月十四日であると考えるのであろう。

なお、この六月十四日は舊曆なので晩夏の候であるが、明治六（一八七三）年元旦に太陽曆に改曆された後も、新曆の六月十四日を生日としていたようだ。たとえば明治四十四（一九一三）年作の「生日」詩（『聽秋仙館詩稿』卷二）に「細風庭院雨如塵、媛綠搖窗樹色新」と見えるように、生日の詩ではしばしば梅雨や新緑など初夏の情景を詠み込んでいるのはそのためである。

二

竹磔の父は森川莊次郎（後に義利）、母は服部筑後守勝全の女美喜（幹子）であった。森川莊次郎と服部美喜とが結婚したのは、慶應四（一八六八）年春のことである。内閣文庫所藏の「江戸城多聞櫓文書」に、森川

二七一

莊次郎が提出した「寄合服部筑後守娘縁組届」なる文書が残されており、末尾に「三月十三日 外國奉行並 森川莊次郎」との署名が見えている。森川莊次郎の外國奉行並在任期間は、慶應三（一八六七）年十一月十三日から同四年閏四月四日までであったので、縁組届の日附が慶應四年の三月十三日であることが分かる。

服部筑後守は、名を新五郎、藤右衛門、藤左衛門、後に勝全とも言い、『柳營補任』（東京大學史料編纂所編『大日本近世史料』所収、東京大學出版會、一九六三―七〇）に據れば、徳川家慶、家定、家茂の三將軍に小納戸役として仕え、その後先手鐵炮役から慶應二（一八六六）年八月には寄合となった。父は服部八郎右衛門、伊賀服部氏の裔で、家祿は二〇〇俵、本所林町四丁目に屋敷があったという^③。森川の家祿は三〇〇俵であるから、相應の家柄であったと言えるよう。

森川莊次郎が縁組届を提出した慶應四年三月十三日と言えば、新政府軍の西郷隆盛が高輪の薩摩藩邸に入り、幕府の全權を委任された勝海舟と直接江戸開城の交渉を行った日である。翌日に及ぶ交渉の結果、十五日の新政府軍による江戸總攻撃は中止となり、翌月十一日に江戸城は無血開城されるのである。幕府崩壊と明治維新という時代の激流の中で、結婚したばかりの二人がどのような思いを抱き、どのように暮らしていたか、具體的なことは何も分からない。ただ彼らもほどなく時代の濤に巻き込まれ、住み慣れた江戸を後にして、静岡に向かわなければならなかったのである。

江戸城開城と同日に、上野寛永寺で謹慎していた徳川慶喜は水戸へ向けて出發し、以後同地で蟄居の身となるが、慶喜に代わって徳川宗家を相續した田安龜之助（當時六歳、後の徳川家達）が駿河府中藩（後に静岡藩と改稱）七十萬石に移封されることが決定すると、慶喜は七月に水戸を出立して海路清水港に入る。舊幕臣たちも旗本から静岡藩士と身分が變わ

り、榎本武揚、大鳥圭介、土方歳三らなど、一部に徹底抗戦を續ける者もいたが、多くの幕臣は家族や従者を連れて静岡に移住した。

森川莊次郎とその家族たちも、江戸を離れて静岡に向かった^④。ただ、いつ静岡に入ったかについては、今のところ不明である。莊次郎は、後に東京に戻って陸軍省兵學寮に出仕するが、『陸軍省日誌』明治五年第十四號の「五月十七日達書寫」に「兵學寮九等出仕 森川莊次郎」と見え、明治五（一八七二）年五月十七日附けで任命されており、すなわち明治五年五月以前には東京へ戻っていたと考えることができる。だが明治五年五月以前の、具體的にいつなのかまでを絞り込むことのできる資料は、まだ見つかっていない。したがって竹礫の出生地に關しても、（一）東京で出生した後に静岡に移住した、（二）静岡に移った後に静岡で生まれた、（三）静岡から東京へ戻った後に東京で生まれた、という三つの可能性が考えられるが、そのいずれであるのか現時点ではよく分からず、後考を俟ちたい。

なお、明治二十五（一八九二）年の八月から九月にかけて、竹礫は京都、美濃大垣等に遊んだが、その途次で次のような詩を詠んでいる（『聽秋仙館詩稿』卷一）。

渡富士川

一段白雲封嶽蓮 一段の白雲 嶽蓮を封じ

淺沙流水只依然 淺沙流水 只だ依然たり

當年記得奉慈母 當年記し得たり 慈母を奉じ

滿地霜華渡此川 滿地霜華 此の川を渡りしを

この時竹礫は、明治二十二（一八八九）年七月一日に全線が開通した東海道線を利用して京都に向かつており、車中から富士川の景色を眺めて

の作であろう。今は汽車で簡単に渡れる富士川だが、末二句は、かつて母とともに、地面一面の霜を踏みしめながら渡ったことがあるとうたっている。川の水面は渡し船で横断したと思われるが、その前後は徒歩の旅であったようだ。

この母を奉じての富士川渡河がいつ頃のことであったのか、詩中から読み取ることができない。その他の資料からも、明治二十五年以前の竹礫と母との旅行を確認することができず、いつどのような状況での渡河であったのかすべて不明である。

だがもし假に竹礫が静岡で生まれ、幼少年期に東京に戻ったとすれば、この富士川渡河は、静岡から東京へ上る際、幼少ながら士族の長男として氣丈に母を守りつつ旅を續けていた時の記憶であったと想像することもできる^⑥。ただ、前掲(三)の可能性のごとく東京で生まれた後に、東京から静岡へ下る時の富士川渡りであったかもしれず^⑦、今はすべて推測の域を出ない。

三

東京に戻った森川莊次郎は、三番町二十番地に居住した^⑧。幼少年期の竹礫もここで過ごしたものと思われる。

幼少の竹礫を伝える資料は乏しいが、竹礫自身の記述によると、彼は七歳の頃に讀書を始めた。「鍵名説」(『得間集』卷上)に「因憶余年七歳初讀孝經、先考謂余曰、云云」と見え、父から素讀を習うこともあり、また清田黙から親しく指導を受けることもあったようだ。竹礫の「追輓詩四章」冒頭に、「清田快雨黙先生」と題する一章が有り(『聴秋仙館詩稿』卷二)。

清田快雨黙先生

等身著述世情疏

等身の著述 世情疏し

陋巷誰知顔子居

陋巷誰か知らん 顔子の居なるを

廿五年前吾七歳

廿五年前 吾七歳

分明記得讀書初

分明記し得たり讀書の初め

と詠じている。

清田黙は、父・莊次郎と同じく舊幕臣で、明治十一(一八七八)年當時竹礫一家と同住所に居住していた。東京都公文書館には、明治十一年二月二十八日附けで清田黙が東京府知事に提出した循誘學舎なる私學の開業願が保存されているが^⑨、その住所は「第三中學區内第三大區三小區三番町貳拾番地」と記載されている^⑩。同開業願の「教員履歷」によれば、清田黙は天保八(一八三七)年五月五日に生まれ、弘化元(一八四四)年十一月より舊姫路藩の儒員であった堤鴻佐の門に學び、安政三(一八五六)年十月から江戸の處士藤森恭助の門に、續いて同五(一八五八)年正月からは幕府の昌平校で學んだという。

循誘學舎は、皇學・漢學を教授する私塾で、「教則」として『皇朝史略』『日本政記』『日本外史』『四書』『五經』『綱鑑易知錄』『十八史略』『文章軌範』『唐宋八大家文』等の課本を挙げ、また「校則」には「入校之者滿十五歳以上ヲ許可ス」「從午前八時至午後四時授業時間トス」と記されている。

竹礫が七歳の頃に、既に循誘學舎かまたはその前身が存在していたかどうかは不明であるが、おそらく循誘學舎の課業と同様に、竹礫も清田黙から和漢の學を授けられたのであろう。

「追輓詩四章」の第二章に描かれている柳澤信大も、幼少の竹礫に詩文や書等を教えたらしい。

柳澤小陽信大先生

典奥詩疑小雅篇 典奥 詩は疑う 小雅の篇なるかと
 魯公筆力紙還穿 魯公の筆力 紙還た穿たる
 學之未就吾才拙 之を學べども未だ就らず 吾が才拙し
 夢裏光陰廿四年 夢裏光陰 廿四年

柳澤信大は、號を小陽、履軒、通稱を退藏と言ひ、中村敬宇が明治六年に設立した同人社の社友であつたという。『敬宇文集』(明治十三年刊)の編者であり、また中村敬宇の自叙傳である『自叙千字文』(明治二十年刊)の題字は、柳澤信大の手になるものである。書家としても著名であつたようで、『悉民帖』(明治二十年刊)『隸書歸去來帖』(同二十一年刊)『三體千字文』(同二十六年刊)等の著が有り、また英和辭書である『英華字彙』(明治二年刊)の訓點や、英書『博物淺解問答』(同二年刊)『代數學啓蒙』(同五年刊)等の和譯、廣東語の辭書『粵東俗字便蒙解』(同三年刊)を著すなど、語學に堪能な人物でもあつた。

竹篔の詩に「夢裏光陰廿四年」とあることからすると、竹篔は八歳の頃から柳澤信大に教えを受けたらしい。なぜ柳澤が竹篔を教えるようになったのか、詳細は不明であるが、竹篔の父莊次郎と柳澤信大との間に交遊があり、その關連からのことであつたのではないかと思われる。

柳澤信大の著書『英華字彙』や『粵東俗字便蒙解』『代數學啓蒙』には、見返しに「松莊館藏板」または「松莊館藏梓」と記されている。「藏板」「藏梓」とは、發行の書肆とは別に、書籍刊行の出資者が存する場合に記されるもので、多くは著者自身かまたはその後援者の堂號等が用いられる。『英華字彙』等に見られる「松莊館」は、森川莊次郎の書齋名であつた可能性が考えられるのである。

明治初期の刊行で他に「松莊館藏版」と稱する書物に、福地櫻癡(源一郎)譯述・辻理之介校『外國事務』(明治元年刊)が有るが、見返し「松莊館藏版」五文字の下部に「森川氏藏版記」、また卷末には「駿藩森川氏藏梓印記」という藏版印が押されており、さらに辻理之介の「小引」に「今淺陋を顧ず之を校正し改めて外國事務と名け、森川氏と謀り之を上木せるものなり」と述べている。すなわち「松莊館」とは、駿河府中藩の森川氏のことであることが知れよう。森川莊次郎は、幕末に外國奉行並や開成所奉行並を歴任しているので外國事務にも通じていたと思われる。『外國事務』出版の出資者となることは大いにあり得たであろう。ただこれだけではまだ、「松莊館」の森川氏を森川莊次郎であると比定することはできない。

「松莊館」が書齋名であれば、藏書印に彫り込まれている可能性があるろう。森川莊次郎は相當な藏書家であり、その一千餘卷の藏書を竹篔に残している^⑩。竹篔の死後はその藏書も散佚したと思われるが、その中の一部が、最近出版された『柏克萊加州大學東亞圖書館中文古籍善本書志』(柏克萊加州大學東亞圖書館編、上海古籍出版社、二〇〇五)に著録されている。通番七七七の『綴白裘十二編』がそれで、今關天彭氏の舊藏書であつた^⑪。同書に據れば、『綴白裘十二編』の藏書印は「□莊館森川氏藏書記」朱文長方、『鬢絲禪侶』朱文方、『赤龍館』朱文長方、『天彭』朱文方印^⑫であるという。『天彭』は今關天彭、『鬢絲禪侶』は森川竹篔の藏書印、その前の「□莊館森川氏藏書記」は、竹篔の父莊次郎の藏書印に違いない。「□莊館」と冒頭一字を缺くのは甚だ残念ではあるが、その他の狀況證據から見ても、「□莊館」は「松莊館」であると考えて良いのではなからうか。

「松莊館」が竹篔の父を指すとすれば、柳澤信大や福地櫻癡、さらに中村敬宇など、洋學系の人物との交流を想像することができ、非常に興

味深い^⑤。莊次郎は、その経歴からみても洋學の知識を持つていたと考えられ、そのことは幼少の竹磔への教育にも何らかの影響を與えているのではないだろうか。柳澤信大は、その著書等から考えると、詩や書のみならずあるいは語學や洋學等も、竹磔に教えていたかもしれない。

四

竹磔は、生來多病であつた。『得聞集』の自序に「人生所可厭者、莫大乎病。予性多病、終年與藥鑪相親」と述べているのは、明治二十三（一八九〇）年の大患後の言葉とはいえ、誇張ではなからう。父も頑健な人ではなかつたようで、明治八（一八七五）年に妹・三吉、十（一八七七）年に弟・莊吉をもうけた後、同十六（一八八三）年十二月九日に病没する。

莊次郎は、先に述べたように明治五年五月に陸軍省兵學寮に出仕し、明治六年八月には兵學大屬に昇任したが、その後「陸軍省日誌」には森川莊次郎の名前が見えない。兵學寮は、明治八年五月九日の御達書において廢止が通達され、以後「陸軍省日誌」には兵學寮の官員たちの配置換えの記事が続いている。舊幕府時代からの親友であつた川勝廣道も、明治八年五月三日の達書で兵學寮幼年學校長を免ぜられ、明治九年の七月一日に陸軍中佐の職を免官されているので、森川莊次郎も明治八年から九年にかけての頃に陸軍省を退職したのではないかと思われる。退職後の莊次郎の動靜を示す資料は、今のところ注⑧に引いた清田黙『増評唐宋八大家文鈔』（八卷）の奥附のみである。

明治二十三（一八九〇）年の父の命日に著した「鍵名説」（『得聞集』卷上）において、「鍵」という名は俗なること甚だしいので、改名してはどうか」という人に對し、竹磔は七歳の時に父から聞いた言葉を引いて次のように反駁する。

先考謂余曰、吾名汝以鍵者、取于周禮所謂管鍵之鍵也。天有星主關鑰、謂之天鍵。鍵之一字不亦重乎。汝學成之日、宜立身行道揚名於後世、以顯父母。吾欲使汝爲斯道之鍵、以導天下後世也。汝其勉旃。距今十六年、而其聲猶在耳。予豈忍改之哉。

先考余に謂ひて曰はく、吾汝に名づくるに鍵を以てするは、周禮の所謂管鍵の鍵を取るなり。天に星の關鑰を主る有り、之を天鍵と謂ふ。鍵の一字亦た重からずや。汝學成るの日、宜しく身を立て道を行なひ名を後世に揚げて、以て父母を顯らかにすべし。吾汝をして斯道の鍵と爲り、以て天下の後世を導かしめんと欲するなり。汝其れ勉旃せよ、と。今を距つること十六年なるも、其の聲猶ほ耳に在り。予豈に之を改たむるに忍びんや。

鍵という名に込められた父の期待に深く感謝し、今も耳に残るその聲を思つて、どうして改名することなどできようか、と云うのである。さらに父の臨終の際の言葉を、

且先考臨終言余曰、汝慎勿倣世間之俗流。吾與汝以此一千餘卷書。汝善讀之、則可爲人師矣。一家之敗必始於不學之人、汝其勉旃。

且つ先考終りに臨みて余に言ひて曰はく、汝慎んで世間の俗流に倣ふこと勿れ。吾汝に與ふるに此の一千餘卷の書を以てす。汝善く之を讀まば、則ち人の師たる可し。一家の敗るるは必ず不學の人に始まる、汝其れ勉旃せよ、と。

と傳え、最後に以下のように結んでいる。

嗚乎余丁先考之憂、實在癸未之冬。至今已八年矣。而碌碌無所爲。日月之逝何其速乎、至此不知身之所措也。時庚寅臘月九日、當先考棄館之日、鏡下揮淚書之、以自警云。

嗚乎余先考の憂に丁ふは、實に癸未の冬に在り。今に至れば已に八年なり。而れども碌碌として爲す所無し。日月の逝くこと何ぞ其れ速やかなる、此に至つて身の措く所を知らざるなり。時に庚寅臘月九日、先考館を棄つるの日に當たり、鏡下に涙を揮いて之を書し、以て自ら警すと云ふ。

父の教えは、俗流に染まらずに學問を積み、天下後世を導くような人物となつて名を残し、家名を高からしめよ、とのことであり、時代を問わず、親が子に残す教訓として一般的な語と言えるであろう。ただこの言葉には、ごく單純に分別すれば、二つの方向性があるように思われる。一つは、社會の指導者となつて國家人民を正しく豊かな方向に導いていく、というもので、具體的には立身出世して政治家や高級官僚、實業家などとして活躍するような方向である。もう一つは、俗世間との交渉を控えてひたすら學問と修養を積み、知識人格ともにすぐれた師として人々を指導する、という道で、文學者や哲學者、教師、さらに言えば聖人として名を残すという方向であろう。この兩方向を、たとえば政治家であると同時に學者であるというように、本人にとつて矛盾なく具有することができれば良いし、實際にそのような人物も古來多數存在する。だが竹篔にとつて、それは難しいことであつたと思われる。

今關天彭氏の「詩人追憶 森川竹篔氏」(「雅友」第十四號所收、一九五三)に據ると、竹篔は十七八歳の頃、外國語學校に入學したことがあつた。

明治生れの氏は、小學校へ入つたかどうかは分らぬが十七八歳にな

ると、外國語學校へ入學した。在學中は教科書を入れた包みを一度も解かず、じつと教師の講義を聞いて居たとのことである。在學二三年にもなり試験も受けず平氣で毎日通學するから、受持教師が怪しんで、どうしてそんなにして居るか尋ねると、氏は宅の執事が毎日學校へ行かねばならぬと八釜しく云ふので通學して居るまでのことで、卒業に就いては何とも考へて居らぬと答へた。教師はびつくりして、それでは學校はやめたが好からう。それにしても君は俊敏だ。何が好きなものはないかと尋ねると、幼年の時から漢學を習ひ、詩文が好きだとのことであつたので、教師から、執事へ相談して退校し、それから氏は詩—特に詞に一心を傾けた。

父の死後、その長子の將來を心配してか、執事がやかましく言つて竹篔を外國語學校に通わせたという。當時の外國語學校は中學校と同じく中等教育機關の一つで、大學や専門學校入學者のための豫備教育を行う施設と位置づけられていた^④。だが竹篔は、試験を受けて卒業し、さらに上級の學校を目指すということには、全く無關心であつたのである^⑤。あるいはこの頃には、世に出て社會を動かしていくのではなく、生涯詩人として生きる道を選んでいたのかもしれない。

この外國語學校入學と同じ頃か、あるいは少し前に、竹篔は溝口桂巖、馬杉雲外の門に入つたようだ^⑥。石川文莊(兼六)が竹篔の死に際して詠んだ「悼森川竹篔」詩(『詩苑』第四十八集「斷腸集」所收、一九一七)に「三十年前共問詩、雲門桂社記追隨。老來俄作無期別、忍讀哀哀絕命詞」と有り、自注に「余與竹篔、知於馬杉雲外溝口桂巖二先生門、故及」という。溝口桂巖は、明治十八(一八八五)年十月には縣吏として浦和に赴任している^⑦ので、親しく教えを受けた期間は短かつたと思われる^⑧。馬杉雲外の方は、入門後數年間は指導を行つた。

馬杉雲外は、山本之寛「文節馬杉繫先生傳」（『雲外餘彩』所收）に據ると、明治十（一八七七）年六月に神田錦町から不忍池の畔の上野花園町に居を移し、そこで温知塾（神田錦町時代は温知學舎と稱した）を經營した。不忍池を「小西湖」、自宅を「蓮水莊」と稱して、詩を樂しんだという。竹磔が通っていたのも、この「蓮水莊」であつた。「蓮水莊」では「蓮水吟社」という詩會が開かれていたようで、そのことを山本之寛氏は次のように記している。

先生又蓮水吟社ト稱スル詩會ヲ開キ時々生徒ニ詩法ヲ教ヘ且ツ小宴ヲ賜リシコトアリ、其會員生徒中、福井六石、加藤松外、五辻醉梅、朽木錦湖、藤波仙溪、森川竹磔、田邊松坡、其他澁谷周平、石川二三造、吉田靜修ノ如キハ最モ高才ニシテ、予素ヨリ之レニ及ハズト雖モ亦追隨ノ榮ヲ得タリ。

雲外門の俊秀十名のうちに竹磔も名を連ねている。

竹磔は、性狷介であつたと言われているが、生涯にわたつて詩友を多く得た。桂巖と雲外の門においても、同門の友人やその關連で多くの人と交わりを結んだと思われる。山本氏が擧げている藤波仙溪、石川二三造（文莊）、またそれ以外に湊庸堂、磯部蒼岨、澤一舟、鈴木菊坡、岡元半仙など、みなこの時期の友人であつた。

やがて竹磔は、雲外門の同門藤澤竹所、篠崎柳園、田中竹陰等と謀つて鷗夢吟社を設立し、その機關誌として『鷗夢新誌』を刊行する。明治十九（一八八六）年一月に發刊された『鷗夢新誌』第一集は、溝口桂巖の題言を冠し、馬杉雲外の文を巻頭に載せ、さらに「例言」に「此篇評閱、係于馬杉雲外先生一手」と宣言するなど、桂巖、雲外の兩師を奉じているが、號が進むにつれて、春濤門下の作や清人の評などが徐々に増え、

兩師の影響を脱していく。森川竹磔は、『鷗夢新誌』の刊行とともに、詩人・詞人として大きく成長していくのである。

注

① 六月二十四日を荷花の生日とする風については、『清嘉録』の顧祿自身の案語で諸書を引いて考證されている。案語に見えない例としては、清・張英の「吳門竹枝詞二十首」第十首に「六月葑門河兩岸、紅妝隊裏畫船隨。荷花生日人爭看、借問何人見一枝」（『文端集』卷十五）とある。なお『清嘉録』は、清・道光十（一八三〇）年に刊行されたが、早くも翌年には日本に舶來し、天保八（一八三七）年には和刻本が刊行されている。詳細は、中村喬氏『清嘉録 蘇州年中行事記』（東洋文庫四九一、平凡社、一九八八）の「解説」を参照。

② 拙稿「森川竹磔家世考」（『學林』第四十二號所收、二〇〇五）参照。

③ 小川恭一『寛政譜以降旗本家百科事典』（東洋書林、一九九七—一九八）の記載に據る。

④ 注②所掲拙稿参照。

⑤ 朝倉治彦編『近代史史料』陸軍省日誌「第一卷（東京堂出版、一九八八）、七十五頁。注②所掲拙稿では、東京へ戻つた時期を明治八（一八七五）年以前としていたが、本資料によりこれを明治五年五月以前と改める。なお、明治六年第四十號の「八月十九日達書寫」（同書同卷四五一頁）に「任兵學大屬 兵學寮九等出仕 森川義利」とあり、兵學大屬に任命されたのが明治六（一八七三）年八月十九日であることが分かる。また、この記述以前の諸資料ではすべて氏名を「森川莊次郎」と稱しており、「義利」という名はこの時初めて見えていることからすると、明治五年から六年にかけての頃に「義利」と稱するようになったと考えることができる。

⑥ 父・森川莊次郎は明治五年五月以前に東京へ戻つていたはずであるが、もし竹磔が静岡で生まれて父とともに上京したとすると、その途次の光景を記憶するにはまだ幼すぎたかもしれない。あるいは先に父が東京へ行き、しばらく後に母らとともに上京したとも考えられるが、いずれにしても想像に過ぎない。

- ⑦ 母・美喜の父服部勝全も維新後静岡に移住しており、前田匡一郎『駿遠へ移住した徳川家臣團』第四編(前田匡一郎、二〇〇〇)に據れば、服部勝全は明治六年八月現在には静岡市水落町一丁目に住んでおり、明治七年には南番町一九へ轉居、さらに明治九年には子息の勝孝氏が相續したという。母の實家を訪ねるために、東京から静岡へと母子で旅をしたこともあったのかもしれない。なお、『鷗夢新誌』第四十八集明治二十三年一月刊に竹篔作「將赴静岡、賦此留別諸同人」詩が收められており、明治二十二年の十二月頃に竹篔が静岡に出かけたことが分かるが、この時母を伴っていたかどうかは不明である。この静岡行は短期間であったようで、同集所収の「己丑除夜」詩に據れば、竹篔は年末には東京へ戻っていた。
- ⑧ 明治十一(一八七八)年九月六日版權免許、同十二(一八七九)年六月出版の清田黙『増評唐宋八大家文鈔』(八卷)の出版人に森川莊次郎の名が見え、「東京三番町廿番地 静岡縣土族 森川義利」と記されている。なおこの記載について、注②所掲拙稿ではこれを誤りとし、実際には三番町三十四番地に住んでいたと論じたが、後に觸れるように當時森川莊次郎と同地に居住していた清田黙の住所を「三番町貳拾番地」と記す資料が見つかったため、前稿の所説を改めたい。「明治十二年四月御届」と奥附のある清田黙『范石湖四時田園雜興詩鈔』では、「静岡縣土族 清田黙 東京麴町區三番町三十四番地」とあるので、明治十一年から十二年にかけての頃に二十番地から三十四番地に轉居したのかもしれない。あるいは明治十一年十一月に、同年七月公布の郡區町村編制法により東京府に十五區が編制されて麴町區が誕生した際に、住所は同一で地番だけが變更になったという可能性も考えられる。
- ⑨ 同開業願は東京都立教育研究所編『東京教育史資料大系』第三卷(東京都立教育研究所、一九七二)に復刻されているが、若干誤字が有る。
- ⑩ 清田黙は、明治二十六(一八九三)年頃まで竹篔一家と同住所か隣接地に住居していたと思われる。「菘竹新篇」第二集(明治十七年十二月刊、後掲注⑭参照)に「東京麴町區三番町三十三番地循誘學舎 快雨 清田嘿」と見え、また、明治二十六年九月二十四日發行の清田黙『嘉永明治史鑑』第一集の奥附でも清田黙の住所を「東京市麴町區三番町三十三番地」と記す。ただ同書第七集(明治二十七年六月八日發行)の奥附には「東京市麴町區中六番町四十八番地」と記載されており、轉居していたことが知られる。竹篔は明治二十九(一八九六)年に西大久保に轉居するまで「麴町區三番町三十四番地」に住んでいた。
- ⑪ 中野三敏『書誌學談義 江戸の板本』(岩波書店、一九九五)等を参照。
- ⑫ 注②所掲拙稿参照。
- ⑬ カリフォルニア州立大學バークレイ校所藏の漢籍善本に今關天彭氏の舊藏書が多いことについては、高橋智氏の書評「版本學の粹、そして古籍流動史へ」(『東方』二九七號所収、二〇〇五)を参照。
- ⑭ 柳澤信大の著書『博物淺解問答』には「九潜館藏板」とあるが、この「九潜館」は、森川莊次郎の親友であった川勝廣道の書齋名である。同じく「九潜館藏板」とある陶慮『佛和會話篇』(明治六年刊)には、見返し右側に「明治六年秋 陶慮著 川勝廣道藏版」と見える。すなわち、親友川勝廣道と同様に莊次郎も書籍刊行の出資を行っていた可能性を考慮することができる。また、『鷗夢新誌』第三集(明治十九年三月刊)巻末の「報告」欄に、森川竹篔名で「小生此迄松莊館補助員タリ館務ニ從事セシガ近來頗多忙ニ附其職ヲ辭シ通常館員ニ列ス江湖辱知諸君ニ謹告ス」という弘報が掲載されている。竹篔が勤めていた松莊館とは、明治十七年十一月から同十八年十月にかけて刊行された雑誌「菘竹新篇」(第一集のみ「菘竹吟篇」と題す)の發行所である。「菘竹新篇」の奥附には「發行所 東京麴町區三番町三十四番地 松莊館」補助 東京麴町區三番町松莊館内 森川竹篔」等と見えており、あるいは父の遺志を受けてその書齋名を冠し、自宅を雑誌の發行所としていたのかもしれない。なお、『英華字彙』の柳澤信大の序文に「余嘗欲編述英漢倭對譯之字書、起稿而未成兮。子達森川君夙有字彙一冊、英士斯維爾士維廉士所著也。頃將刷行公諸世、就余而謀焉。余喜其所見之符也。德源贊成、不敢自揣、加之訓話、且辨一言、以爲其鳴道云爾」とあり、もし松莊館が森川莊次郎を指すならば、「子達」はその字號であると考えられる。
- ⑮ 福地櫻癡は、外國奉行柴田剛中(日向守)の隨員として二度目の渡歐を終えて、慶應二年正月に歸國するが、その後外國奉行支配同心や外國奉行支配調役などを歴任して維新に至っている。この期間は、森川莊次郎の

外國奉行並在任期間と重なっている、両者はおそらく面識はあったと思われるが、管見の範囲では、直接的な交渉を示す資料はまだ見つからない。

⑩ 文部省編『學制百年史』（帝國地方行政學會、一九八一）参照。

⑪ 洋學に對する知識や關心が全く無かつたわけではないことは、「詩人追憶 森川竹磔氏」の別の箇所「氏は家産を破つてから、小鳥や草花の飼方や栽培方などを英書から繙譯して、生計を立てて居たが、外國語學校で英語をやつても教科書を捨ておき、ただ教師の言ふことを耳から入れたので、英書はよく讀めぬ。そこで人を備つて英書を讀ませて、自分はそれを聞きつつすらすと譯を進めて行つたのである。」とあり、また「その聰明は數學の零に關する理論を雜作もなくはつきり云ひあらはすのによつても明かだ」とあることからかも知れよう。先に述べたように、幼少の頃に父や柳澤信大などから洋學の手ほどきを受けていたかもしれない。

⑫ 注⑭に引いた「菘竹新篇」は、溝口桂巖・馬杉雲外・清田快雨門下らの詩文を掲載した雑誌であるが、明治十七年十一月刊の第一集から既に竹磔の詩が録され、發行所も竹磔の自宅である「東京麴町區三番町三十四番地 松莊館」とし「補助 森川竹磔」とあることから、明治十七年

十一月以前には桂巖・雲外門に入っていたか、あるいは緊密に交流を持っていたものと思われる。なお、「菘竹新篇」と同誌所収の竹磔詩文に關しては、拙稿「竹磔若年の詩詞分―集外詩詞四十九首及び佚文五篇―」（風絮）第三號所収、二〇〇七参照。

⑬ 依田學海・溝口桂巖『墨水廿四景記・墨水三十景詩』（太平書屋、一九九二）の齋田作樂氏解説参照。

⑭ 水原琴窗氏「填詞專家森川竹磔先生の想い出」（『聽秋仙館詩稿』所収、森川竹磔遺稿刊行會、一九六七）に「森川竹磔先生は森槐南とは性格もかなり異なっていた。槐南が幫閑詩人と呼ばれるのに對し、竹磔先生は狷介不屈の處士として、全く、對照的でさえあった」と述べられている。

附記

『陸軍省日誌』や『江戸城多聞櫓文書』、私學開業願等の資料に關しては、國立歴史民俗博物館の樋口雄彦氏より覆印の惠寄を忝なくし、また懇切なる御教示を賜った。ここに一言記して厚く御禮申し上げる。

（小樽商科大学言語センター教授）